



これによって生成される構文を本研究では「場主語構文」と呼ぶ。この〈アル〉と〈モツ〉の関係を中心にし、〈アル〉ことの原因として〈ナル〉〈スル〉が読み込まれることによって様々な事象がこの場主語構文とその拡張事例として生成されると考える。以下

(6) ~ (12) の (b) はすべてこの場主語構文として統一的に分析できることを示す。<sup>5</sup>

- (6) a. その仕事に (は) 危険が伴う。                      b. その仕事は危険を伴う。  
 (7) a. 火山から火が噴いた。                              b. 火山が火を噴いた。  
 (8) a. そのトラックには爆発物が載っている。      b. そのトラックは爆発物を載せている。  
 (9) a. 太郎の席が (A から B に) かわった。          b. 太郎は (A から B に) 席をかわった。  
 (10) a. 大雨で川の水かさが増した。                    b. 大雨で川が水かさを増した。  
 (11) a. 台風で太郎の家の屋根が飛んだ。            b. 太郎は台風で家の屋根を飛ばした。<sup>6</sup>  
 (12) a. 美容師が美容院で花子の髪を切った。        b. 花子は美容院で髪を切った。<sup>7</sup>

## 2. 先行研究と問題提起

### 2.1 状態性の他動詞、関係動詞

- ・ル形とテイル形でアスペクトの対立がない動詞群がある。それは「関係動詞」(森山 1988、工藤 1995、山岡 2000) と呼ばれている。山岡 (2000: 205-271) の状態動詞分類よりヲ格名詞をとる動詞を抽出したものを表 1 に示す。<sup>8</sup>

表 1

#### 【問題提起】

- ・関係動詞はもちろん属性動詞、所要動詞も〈所有〉をもつ動詞と言えないだろうか。

分類	下位分類	動詞例
属性動詞	嗜好・要求	好む、欲する、嗜む
所要動詞		要する
関係動詞	包含・所有関係	含む、包含する、誇る、有する、擁する…
	記号関係	表す、意味する、含意する、示す…

表 2

①存在	①'	(人から)迷いが去る	(人が)迷いを去る
(仕事に)危険が伴う	(仕事)が危険を伴う	③モノの非意図的・再帰的な変化事象	③'
②発生/消失	②'		
(人に)子供が授かる	(人が)子供を授かる	([地面に]人)の手がつく	(人が[地面に])手をつく
(金属に)緑青が噴く	(金属)が緑青を噴く	(人)の目が閉じる	(人が)目を閉じる
(木に)実が結ぶ	(木)が実を結ぶ	(花)の蕾が開く	(花)が蕾を開く
(人に)眠気が催す	(人が)眠気を催す	(潮)の渦が巻く	(潮)が渦を巻く
(火山から)火が噴き出す	(火山)が火を噴き出す	(川)の水が増す	(川)が水を増す

### 2.2 両用動詞というカテゴリー (→例文 6, 7, 10)

- ・両用動詞とは自動詞と他動詞が同形で同じ表現的意味を表す。(森田 1994[1990])
- ・森田 (1994) の両用動詞の存在理由: 「他動詞のほうが自動詞に歩み寄る」

<sup>5</sup> 複他動詞 (〜ヲ教える・預ける・授ける) に対する単他動詞 (〜ヲ教わる・預かる・授かる) も場主語構文として分析できるが、ここでは省略する。影山 (2002a) および小柳 (2010) を参照されたい。

<sup>6</sup> cf. 天野 (1987) の「状態変化主体の他動詞文」

<sup>7</sup> cf. 佐藤 (1994) の「介在性の表現」

<sup>8</sup> 山岡 (2000) は、文機能論という視点から、従来のアスペクトによる分類では状態動詞に分類されていたものを、狭義の状態動詞 (「いる」「ある」「要る」) とそれ以外の「叙述動詞」に範疇化し、後者をさらに「可能動詞」「属性動詞」「所要動詞」「価値動詞」「関係動詞」に下位分類した。

### 【問題提起】

- (i) 両用動詞が「自動詞文の現象」(森田 1994 : 238)を表すならば、他動詞が自動詞に歩み寄るだけでなく、自動詞から他動詞の意味が生まれる場合もあるのではないか。
- (ii) 表2の他動詞側の①'②'③'はどのような意味概念を持つと言えるだろうか。<sup>9</sup>

### 2.3 有対自動詞の両用動詞化という言語現象(→例文9)

- ・有対自動詞で形態上対立する他動詞をもちながら、同形態のままヲ格名詞をとり、構文上は他動詞となる現象を本研究では「有対自動詞の両用動詞化」と呼ぶ。
- ・代表的な例:「目をあく」「席をかわる」「仕事を終わる」「計算を間違う」
- ・言葉のゆれなのか、それが自動詞なのか他動詞なのか、意味の違いは何か、なぜヲ格が現れるのかなどが議論されてきた。<sup>10</sup> 須賀(1981)では「疑似的な構文論的自他対応」であるとし、「(口を)あく」は自動詞だと結論づけている。

### 【問題提起】

- (i) 同形態のまま自動詞文と他動詞文を作るのであれば、両用動詞の存在理由と結び付けて分析する必要があるのではないか。
- (ii) 自動詞の形態のままヲ格名詞をとる場合、これを単に構文的な自他対応として片付けていいのか。既存の語彙的ヴォイスの枠組みでこの現象の本質を説明できるのか。

### 2.4 非意図的な状態変化を表す他動詞文

- ・天野(1987)の「状態変化主体の他動詞文」:天野は(11)のような文を他動詞文の一つの用法として位置付ける立場から、主体の動きの点からは動作性がきわめて低い「事態を所有する」という意味になり、主体の状態変化を表す文になっていると考えた。  
(13) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。(天野 1987 より)
- ・このような他動詞文が成立する条件
  - (ア) 使役変化動詞で成立(働きかけ動詞では不成立)
  - (イ) ガ格名詞とヲ格名詞が「全体部分」の関係 (以上は天野 1987 より)
  - (ウ) ガ格名以外に事態を引き起こす原因の存在 (児玉 1989 より)
- ・稲村(1995:62)はこのような文ではキャンセル文が成立しないことを指摘した。  
(14) a. 芋を焼いたが、焼けなかった。  
b. \*宮地さんは、火事の焰で背中を焼いた。しかし、火勢が弱くて焼けなかった。
- ・杉岡(2002)の「自発変化他動詞文」:非意図的な事象を表す他動詞文「～が～を Adj-める」を、再帰構文として分析。  
(15) 風の勢いが強まる／風が勢いを強める

### 【問題提起】

- (i) 全体部分の関係に注目するにしても、再帰に注目するにしても、いずれも他動詞側からの分析アプローチである。しかし〈所有〉が関係しているのなら、存在に対応するものとして自動詞側からのアプローチも考えてみるべきではないか。
- (ii) 成立条件(ア)と稲村(1995)の指摘は、この構文の成立が自動詞側(ナル・アル)がベースになっていることを強く示唆しているのではないか。

<sup>9</sup> 表2は、森田(1994:239-240)が挙げた両用動詞の例を自動詞が表す意味概念①~③で分類し、自他の意味の対応が分かるように主語名詞、場所名詞を( )に補ってまとめたものである。

<sup>10</sup> 水谷(1964)、櫻井(1977)、須賀(1981,1990)、福島(1991)など。

## 2.5 非対格性をもつ他動詞の存在と言語化の視点

- ・影山（1996）は、語彙意味論の観点から〈所有〉が〈存在〉から語彙概念構造（LCS）の変換によって生まれることを示した上で、両用動詞のように同形態で自他交替するのは、この二つの意味構造が統語構造へ投射された結果だと考えた。影山（2002a）では非対格性をもつ他動詞の存在を指摘し、〈所有〉とのつながりを理論的に示した。
- ・影山（1996：284-288）では、「ナル型」言語である日本語が「ナルからスルへ拡大」するという視点で日本語の構文の拡張を論じている。ここで影山は（11）（12）のような他動詞文の主語を「上積みされた経験者主語」（p.286）であるという見方を示した。

### 【問題提起】

本研究は自動詞側からの分析アプローチという点で、上述の影山の立場を支持するものがあるが、その分析では「上積みされた経験者主語」とはどのようなものなのかが十分に説明されているとは言えない。<sup>11</sup>

## 3. 場主語構文の分析

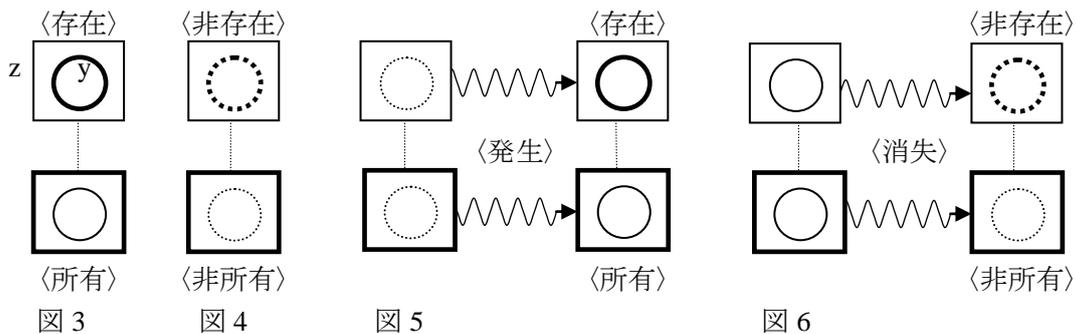
### 3.1 事象の認知的把握と〈存在〉〈所有〉をベースにした分析モデル<sup>12</sup>

#### (16) 場主語構文の定義（図3,4参照）

場主語構文とは、〈存在〉において対象物の存在する場が焦点化され、「場」と「対象物」が「所有者」と「被所有者」の関係として把握し直され、統語構造で「場」を主語とする、〈所有〉の意味概念をもつ二項述語となったものである。

#### (17) 構文の拡張について（図5,6参照）

〈存在〉の原因として読み込まれる事象によってその結果物の〈所有〉という構文へと拡張する。原因が読み込まれることによって、「場」はあるモノの〈非所有〉から〈所有〉（またはその逆）へと変化する。これを「静的な所有」に対して、「動的な所有」と呼ぶ。



#### (18) 場の焦点化の意義

場の焦点化は、その場が、そこに対象物がある状態によって特徴付けられるという認知的な事象把握による。つまり、その対象物がそこにあることがその場を特徴付けるのに意義があると認知されるということ、「場」の変化全体に注

<sup>11</sup> その後、影山（2002b）で「概念構造のクローン形成」という分析を展開している。

<sup>12</sup> □は場所を、○は事態の参与者としてのモノ（人を含む）を、波線の矢印は変化を表している。点線で示された図は該当するモノがないことを示している。太線はそれに焦点が当たっている（：認知言語学の観点から言えばプロファイルされている）ことを示している。

目することにその意義がある。<sup>13</sup> 言い換えれば主語名詞が「何をした」のかではなく「どうなった」のか、その変化に注目する構文である。<sup>14</sup>

### 3.2 場主語構文の基本型（静的な所有）と拡張（動的な所有）

#### 【基本型】：場所（z）とモノ（y）

- ・モノに焦点が当たれば〈存在〉〈非存在〉の自動詞構文が生成される（図 3, 4 上段）
- ・場に焦点が当たれば〈所有〉〈非所有〉の他動詞構文が生成される（図 3, 4 下段）
  - ⇒**A1** 「z に y が 〈存在〉」・・・伴う [表 2-①] [→例文(4a)]
  - ⇒**A2** 「z が y を 〈所有〉」・・・伴う [表 2-①'] [→例文(4b)]
  - ⇒**B1** 「z に y が 〈非存在〉」・・・欠ける<sup>15</sup> [→例文(5a)]
  - ⇒**B2** 「z が y を 〈非所有〉」・・・欠く [→例文(5b)]
- ・ヲ格をとる状態動詞（表 1）も基本的にこの**B2**に分類される。ただし対応する〈存在〉の言語化にあたっては、形容詞が現れたり<sup>16</sup>、自動詞が現れたりする。

表 3

ガ 形容詞/自動詞	〈存在〉 / 〈所有〉	ヲ 他動詞
好きだ・欲しい	← (好みとして)・(欲求として) アル/モツ →	好む・欲する
要る	← (必要物として) アル/モツ →	要する
ある	← (内部に) アル/モツ →	含む
	← (長所として) アル/モツ →	誇る
	← (自分の指揮の下に) アル/モツ →	擁する

#### 【拡張 1】：場所（z）とモノ（y）

##### ■モノが「アル」 / 「ナイ」の原因事象として〈発生〉 / 〈消失〉が読み込まれる

- ・モノに焦点が当たれば〈発生〉 / 〈消失〉の自動詞構文が生成される（図 5, 6 上段）
- ・場に焦点が当たれば、結果として発生物を〈所有〉 / 消失物を〈非所有〉という他動詞構文が生成される（図 5, 6 下段）
  - ⇒**C1** 「z {に・から} y が 〈発生〉」・・・授かる、噴く、結ぶ、噴き出す [表 2-②]
  - ⇒**C2** 「z が y を 〈発生〉」・・・授かる、噴く、結ぶ、噴き出す [表 2-②']
  - ⇒**D1** 「z から y が 〈消失〉」・・・去る [表 2-②]
  - ⇒**D2** 「z が y を 〈消失〉」・・・去る [表 2-②']

##### ■モノが「アル」の原因事象として〈移動〉<sup>17</sup>が読み込まれる

- ・モノに焦点が当たれば〈移動〉の自動詞構文が生成される（図 7 上段）
- ・場に焦点が当たれば、移動物を〈所有〉という他動詞構文が生成される（図 7 下段）

<sup>13</sup> このような見方は、分析のアプローチこそ違っても、天野（1987）が状態変化主体の他動詞文の主語名詞と目的語の「全体部分」の関係を認知的な観点から定義したものと共通したものがある。

<sup>14</sup> 影山（2002a）の統語テスト（What does X do?）によれば、英語の非対格他動詞も「する」ではなく「なる」という主語名詞の状態変化として捉えられるという。

<sup>15</sup> 「欠ける」「欠く」は変化動詞から状態性の動詞へとシフトしているので**B**に分類しておく。

<sup>16</sup> 形容詞述語が存在文と並行的に捉えられることについては、語彙意味論的な観点による影山（1996）の分析、認知言語学的な観点による岡（2002）の分析を参照されたい。

<sup>17</sup> ここで〈移動〉とは位置変化のこと。また再帰ではない移動である。再帰性をもつ〈移動〉も〈所有〉をもつ場主語構文を生成するが、紙幅の都合で省略する。「花子は顔に墨を付けている」など。

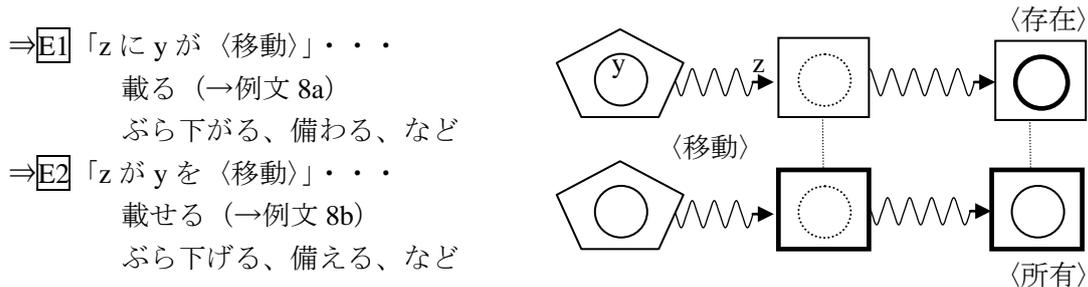


図 7

- (19) その赤頭巾の童話は、二つの絵を載せていた。[BCCWJ (あ)]  
 cf. その童話には絵が載っていた。
- (20) 向かいの茶屋は軒並に赤い箱提灯をぶら下げている。[BCCWJ (い)]  
 cf. 茶屋の軒並に赤い箱提灯がぶら下がっている。
- (21) この最初の動力織機は、(…略…)よこ糸が切れたときには機械が自動停止するなどの装置を備えており、(…略…)。[BCCWJ (う)]  
 cf. この動力織機に…装置が備わっている。

**【拡張 2】：状態変化：変化対象 (y) と所有者 (w→z)**

- ・〈存在〉〈発生〉〈移動〉と異なり〈変化〉<sup>18</sup>には必須項としての「場所」はない。
- ・言語化する際に「所有者<sup>19</sup>の出来構造化<sup>20</sup>」が起きていると仮定すると、「場」が変化結果を動的に所有するという関係を表す他動詞文が生成されることが説明できる。

(22) 所有者の出来構造化

「w の y」という所有関係をもつモノが変化するという事象において、「w という場」において「y が変化する」という事象が発生した (=出来した) と見ることである。自身の部分/側面の変化は自身全体の変化として認知される。

- ・〈発生〉が読み込まれるイメージスキーマ (図 5) のメタファー・リンクによると考えらえるが、モノに注目するのではなく、あくまでも「場」全体の変化と捉えるところにその特徴がある。

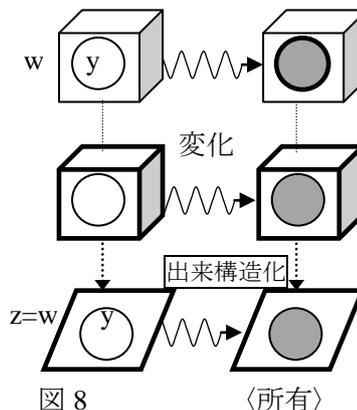


図 8

■モノが「(その状態に)アル」の原因事象として〈変化〉が読み込まれる

- ・モノに焦点が当たれば〈変化〉の自動詞構文が生成される (図 8 上段)
- ・場に焦点が当たれば、変化結果を〈所有〉という他動詞構文が生成される (図 8 下段)

- ⇒F1 「w の y が 〈変化〉」・・・つく、閉じる、開く、巻く、増す [表 2-③ ]
- ⇒F2 「w が y を 〈変化〉」・・・つく、閉じる、開く、巻く、増す [表 2-③']

<sup>18</sup> 本稿では変化事象のうち、位置変化を〈移動〉、状態変化を〈変化〉と表記している。  
<sup>19</sup> ここでいう所有者とは、狭義の所有にとどまらず「全体部分」「主体とその側面」「主体と生産物」の関係の「全体」「主体」も含む。最終的には客観的な関係ではなく話し手の主観的な判断によるものである。  
<sup>20</sup> ヴォイスにおける「出来」の視点は、尾上 (1998-1999) の「出来スキーマ」からヒントを得ている。

### 3.3 場主語構文の動詞の形態についての仮説<sup>21</sup>

- ①基本型および下位事象のみが原因として読み込まれる場合には独自の形態をもつか、または自動詞と同じ形態のまま自他交替する。⇒**A****B****C****D**、**E**
- ②上位事象も原因として読み込まれる場合には使役変化他動詞と同じ形態が用いられる。⇒**G**
- ③ただし、形態上対立する他動詞がある場合には、②が明示的でない場合でも、その他動詞と同じ形態が用いられるのが普通である。⇒**E**および例文 (15) (※他動詞側からのアプローチとの接点か?)

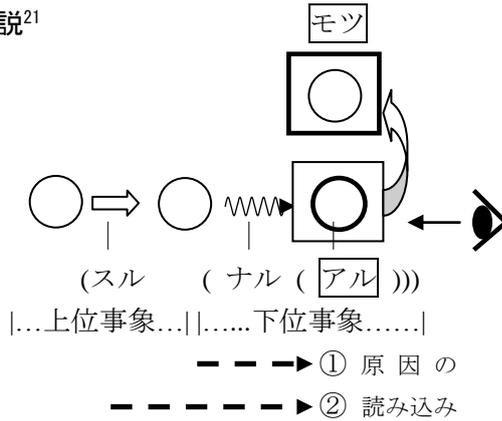


図 9

- (23) 人の頭にこぶができる。 ⇔ 人が頭にこぶを作る。
- (24) 桜の木に芽が出る。 ⇔ 桜の木が芽を出す。
- (25) 八六二〇形は“ハチロク”と呼ばれて親しまれ、晩年は急速にその数を減らしたものの、一九七五年三月まで生き延びている。[BCCWJ(え)]
- ・有対自動詞の両用動詞化(→例文 9b)は③の反例のように見えるが、ある特別な成立条件の下で①が適用された場主語構文だと考える。<sup>22</sup>「醤油を切らした」のような例もある。

#### 【拡張 3】状態変化：変化対象 (y) と所有者 (w→z)

- ・(11b) (13) で主語名詞がまったく事態の成立に仕手として関与しないのに、使役変化他動詞が用いられているのは仮説②による。ただし生産性は高くない。
- ・「使役変化事象」が読み込まれるが、主語名詞は変化の使役者/原因ではなく、「場」すなわち使役変化の結果の所有者である。使役変化他動詞文なら主語名詞になるはずの「読み込まれた原因者」は格下げされ、(通常は)「～て」「～で」で表示される。

- モノが「(その状態に)アル」の原因事象として上位事象とその〈変化〉が読み込まれる  
 ⇒**G1** 「(…で) w の y が 〈変化〉」・・・(11a)  
 ⇒**G2** 「(…で) w が y を 〈変化〉」・・・(11b) (13)

(26) 私は津波で車を流してしまい、自宅にあった軽トラを今は運転しています。<sup>23</sup>

### 4. まとめと課題

- ・〈存在〉と〈所有〉の関係をベースにした自動詞側からの分析アプローチによって冒頭の例文 (6) ～ (11) が場主語構文という統一的枠組みで分析できることを明らかにした。
- ・構文の拡張の度合いによって**A**～**G**のタイプに分類したが、この〈存在〉と〈所有〉にリンクした自他交替を〈語彙的ヴォイス〉とするか、それとも〈統語的ヴォイス〉とするか？(仮説①⇒語彙的ヴォイス：所有動詞？ 仮説②③⇒統語的ヴォイス：所有態?)
- ・例文 (12) の「介在性の表現」を射程に入れる：(間接)受動態・受益態・所有態？
- ・「場」を焦点化することの動機づけと場主語構文が現れる文脈の調査と関連付けの作業。

<sup>21</sup> 同形態で自他交替する理由については、影山 (2002a) の考え方を本研究でも採用する。

<sup>22</sup> 主語名詞の位置変化とそのメタファー (：時空間の移動、思考経路の移動) が「場」の変化をプロファイルする場主語構文の生成を動機づけていると考えられるが、これについてはさらに検討の必要がある。

<sup>23</sup> <http://ameblo.jp/ayu6170/day-20110413.html> 検索日：2011/09/10

## 例文出典（本文中の[BCCWJ]と付された例文）

『現代日本語書き言葉均衡コーパス モニター公開データ 2009 年度版』（国立国語研究所）による

（あ）小此木啓吾『フロイト思想のキーワード』（い）松井今朝子『奴の小万と呼ばれた女』

（う）和田一夫『豊田喜一郎伝』（え）諸河久/花井正弘『JR の動態保存車両』

## 参考文献

天野みどり（1987）「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151, 左 1-14 (110-97).

バンヴェニスト, エミール (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房, [Benveniste, E. (1966) *Problèmes de Linguistique Générale* の翻訳].

福島直恭（1991）「他動性と自動性の対立の解消に関する一考察」『学習院女子短期大学紀要』29, 107-122.

早津恵美子（1991）「所有者主語の使役」『東京外国語大学日本語学科年報』13, 1-25.

Heine, Bernd (1997) *Possession: Cognitive sources, forces, and Grammaticalization*, Cambridge Univ. Press.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

稲村すみ代（1995）「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報』16, 55-80.

影山太郎（1996）『動詞意味論 -言語と認知の接点-』くろしお出版.

影山太郎（2002a）「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会, 119-145.

影山太郎（2002b）「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2 (2), 日本語文法学会, 22-45.

児玉美智子（1989）「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大紀要』9, 67-80.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.

Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Vol. II Descriptive Application*, Stanford Univ. Press.

水谷静夫（1964）「話を終わる」と「話を終える」『ゆれている文法（口語文法講座3）』明治書院, 45-60.

森田良行（1990）「自他同形動詞の諸問題」『国文学研究』120, 早稲田大学国文学会, 331-341（『動詞の意味論的文法研究』（1994）明治書院に所収 232-252）

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院.

岡智之（2002）「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク -日本語文法論への存在論的アプローチ-」『認知言語学論考』2, ひつじ書房, 111-156.

尾上圭介（1998-1999）「文法を考える 5 出来文」『日本語学』17(7),17(10),18(1), 明治書院.

小柳昇（2009）「〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の分析 -語彙概念構造における「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」のプロセス-」拓殖大学大学院言語教育研究科修士論文.

小柳昇（2010）「コーパスに基づいた漢語サ変動詞の他動詞用法の分析 -「場主語構文」の観点から-」『言語・地域文化研究』16, 東京外国語大学大学院, 69-91.

櫻井光昭（1977）「古代語の再帰的他動詞」『學術研究（国語・国文学編）』26, 早稲田大学教育学部, 67-82.

佐藤琢三（1994）「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84, 日本語教育学会, 53-64.

佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院.

須賀一好（1981）「自他違い -自動詞と目的語、そして自他の分類-」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店, 543-567.

須賀一好（1990）「〈終了〉の意味と自他の形態 -他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析-」『日本語と日本文学』13, 筑波大学国語国文学会, 20-27.

杉岡洋子（2002）「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐる」『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会, 91-116.

鈴木容子（2008）「日本語における非行為者主語の他動詞文」『日本語文法』8 (2), 71-87.

山口巖（2003）「「もつ」の言語・「ある」の言語」『言語』32(11), 大修館書店, 30-37.

山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版.